

建築家・藤本壮介、『Future Beauty』展を語る

藤本壮介建築設計事務所 藤本壮介

LECTURE

ARCHITECT, SOU FUJIMOTO, TALKING ABOUT THE FUTURE BEAUTY SHOW

Sousuke FUJIMOTO, Sou Fujimoto Architects

What I felt through the design of exhibition spaces for the Future Beauty: 30 Years of Japanese Fashion exhibition at the Barbican Art Gallery in London, and Haus der Kunst in Munich, and the Museum of Contemporary Art Tokyo, was that there are several important factors to be considered when exhibiting fashion works. The first is the scale of works exhibited. The exhibition of clothing places human-scale works side by side; therefore how to show them rhythmically needs to be considered. The second is the scale of the exhibition space and exhibited works. Exhibitions integrating large rooms and small works are necessary. The third and the most important is to connect the three factors of an exhibition—people, works, and spaces—through exhibition space design and to make them harmonize, and to produce new landscapes and new experiences.

KCIは2012年8月8日、日本経済新聞東京本社「SPACE NIO」にて「建築家・藤本壮介、『Future Beauty』展を語る」と題する講演会を開催した。本講演は、2012年7月28日から10月8日まで東京都現代美術館で開催された「Future Beauty 日本ファッションの未来性」展の関連イベントである。藤本壮介氏は2010年のバービカン・アート・ギャラリー（ロンドン）、2011年のハウス・デア・クンスト（ミュンヘン）、2012年の東京都現代美術館において「Future Beauty」展の展示デザインを担当した。本講演では3館での展示デザインを通して、ファッションをテーマとした展示について存分にお話しいただいた。

尚、藤本氏は「Future Beauty」展だけでなく、自身の建築作品を題材に様々な空間論を語ったが、誌面の関係上、本稿ではその部分を割愛し、「Future Beauty」展に関する内容を中心に紹介する。

正直に申し上げますと、僕はそんなにファッションには詳しくありません。ですが、展示デザインを通して、展覧会でファッションを見せるということについていろいろと考えたことをお話しできればと思っています。

2年前になりますが、ロンドンのバービカン・アート・ギャラリーで、「Future Beauty」展の会場デザインをしました。「Future Beauty」展の1回目の展覧会です。バービカン・アート・ギャラリーは天井高が6 mくらいある大きな空間で、そこにマネキンが並びました。服を着せるマネキンは1 m80 cmくらいですので、6 mの天井と1 m80 cmのマネキン、このギャップをどうしようかというところが最初の関門でした。つまり、大きな空間にマネキンを置いただけでは寂しくなるのではないかと危惧したのです。

あわせて、海外で日本のファッションを見せる意味も考えました。世界へ飛び出した日本ファッションの歴史を見せる展覧会なので、ある種の「日本的なもの」を使うことで空間をつくっていけばどうだろうかと考えました。そして、和紙のような半透明の不織布を使って空間構成をしようという結論に至ったのです。使用した不織布は日本のメーカーがつくったもので、手ですぐ裂けるぐらいの非常に繊細な布です。その布を大々的に使用して空間を構成していくことにしました。

展覧会の第1のセクション「陰翳礼讃」と次の「平面性」ではダイナミックに布を垂らして展示エリアを分け、布の垂らし方の違いでセクションのキャラクターをつくりました。この布は半透明で布越しに向こう側が見えるので、見ている人にはちょっと面白そうなものが向こうにありそうだなという予感が生まれます。半透明の布を使った大きな理由がここにあります。

少しずつ進んでいくと、第3のセクション「伝統と革新」に入ります。ここではより幅の狭い布を使用しました。2 mぐらいの布が幾重にも重なっていろいろな向きで垂れ下がっており、会場を歩いていくと、向こう側にスポットライトを浴びたマネキンが少しずつ見えてくるわけです。半透明の布が幾重にも重なるなか、マネキンが向こうからふっと出てきて、裏に回るとまた別のマネキンが現れ、次々と姿を見せる。それが自然に感じられるようになっています。

この「Future Beauty」展はロンドンの後、ミュンヘンのハウス・デア・クンストという美術館に巡回しました。この美術館の建物はヒトラーが自分のプライベート美術館として建設したのが始まりで、それを現代アートの美術館として再利用しているという代物です。

僕らに与えられた展示スペースは、いくつかの部屋が連続してできた、長さが100mぐらいあるとても細長い空間でした。天井の高さはバービカンより低く、確か5m弱ぐらい

です。その長大な空間を見て最初に思い浮かんだのが、ファッション・ショーのランウェイ。ランウェイを歩くモデルのような感じでマネキンが並んでいると面白そうだな、ということ現場で考えたりしながら展示デザインを考えていきました。

ここでもロンドンと同じ白い布を使いました。最初のセクション「陰翳礼讃」では、ロンドンのように別々の向きではなく、細長い部屋を区切るように平行に布を挟み込んでいきました。この布と布の間には、大体3体くらいマネキンが入っています。この布と布の間に入っていくと小さな部屋のようになり、来館者はその部屋をひとつひとつ訪れていくようなつくりになっています。来館者はある小部屋の中にいたとしても、隣の小部屋の衣装を薄い布を通して見ることができる。さらにその次の小部屋の衣装もうっすら見えていて、それが永遠に続いていくような錯覚に陥るのです。

そして、ロンドン展とミュンヘン展の大きな違いは、白い布だけでなく黒い布も使用したこと。第2セクションの「平面性」の部屋では、第1セクションと同じようにマネキンを一列に並べましたが、白い布の代わりに黒の透けるオーガンジーを垂らしました。この布を垂らすとまるで薄墨を張ったようになり、そこに光がきらきら反射して、かすかな光の面のようなものが見えます。最初の「陰翳礼讃」のセクションでは白い布を使ったため、ぼんやりとした曖昧な雰囲気でしたが、黒い布を垂らした「平面性」の部屋に入るとぱっと光量が切り替わり、黒い布が平面の切り口のように見え、非常にシャープな空間が現れます。そして、黒い布を通り越した瞬間、黒が視界から消え、まるですっと視界が晴れあがっていくような、目の前にあるものが突然鮮やかに見えてくる、そういう視覚的効果を生み出しました。

その奥に、第3のセクション「伝統と革新」と第4のセクション「クール・ジャパン」が合わさった部屋がありました。ここでは、薄手のビニールシートを上から吊りました。見えないけれども、光の屈折で何かが存在するのが認識できるという、アイロニカルな展示空間がつけられるんじゃないかなということをやってみました。

最後は東京都現代美術館での「Future Beauty」展です。ロンドンでは白い布だけを使用し、次の白と黒の布、そして透明なビニールシートを使うなど、素材のバージョンを変えながらも、布を吊るすということはずっとやってきました。しかし東京展では、全部布でやるのはどうかと考えたのです。というのも、東京都現代美術館の展示会場は少し特殊な構成で、最初のセクションは天井の低い細長いスペース、次の第2・第3セクションは天井が6mくらいある大きな部屋という、まったく違う空間が連続していたからです。さらに、日本で開催する展覧会で日本を連想させる和紙のような布を使うというのはわざわざ

しいのでは、という心配もありました。考えた末、布を使うのは最初の「陰翳礼讃」のセクションだけにして、他のところは別の方法を試そうということになりました。

第1のセクションで使用した布ですが、ロンドン、ミュンヘンよりもっと透明度の高い布に変更しました。そして、海外展では布の下に1cmぐらいの鉄のバーを入れておもりになっていたのを、東京展では布の下側を垂らしっぱなしにし、空調の風などでひらひらと常に揺れ動いているような状態にしました。この布は光を反射させるので布がふわっと動くたび、見ている人の目にきらきらと光が飛び込んできます。マネキンが一直線にならんでいるところに、光がオーロラのように浮かび上がるのです。

次に「平面性」のセクションが続きますが、東京展では作品がかなり入れ替わり、数が増えました。「平面性」のグループがたくさんできあがったので、東京には空中にフラットな面が一枚あるような感じで、服を吊ったりマネキンを並べました。また、テキスタイルを絵画のように美術館の壁に掛けました。普通のファッション展ではマネキンが置かれている場所がメインで、壁は使われない場合が多いのですが、あえて服を壁に掛けることで、美術館でファッション展を開催するという両義性みたいなものが浮き上がってくるのではということも考えました。

第3のセクション「伝統と革新」についてですが、ミュンヘンでは透明のビニールを垂らしていましたが、東京では鏡を使いました。高さが2.5mぐらいある大きな姿見のような鏡を8枚ぐらい、いろいろな向きに設置しています。展示会場を歩いていくと突然、自分と自分が着ている服が鏡の中に映り込みます。自分や自分の服が鏡に映ることで、美術館に展示している服とわれわれの間関係が逆転したり、近くなったり遠くなったりします。鏡を使ったのは、展示している服と、それを見に来たお客さんが着ている服、その両者の関係を複雑化させることができるのではないかと考えたからです。

また、この「伝統と革新」とその前の「平面性」のセクションでは、マネキンを床と同じレベルに置きました。ロンドンやミュンヘンでは台の上に乗っていたのを、床のレベルまで引き落としたのです。こうすることで、見ている人と同じ視点まで衣装が下りてきます。先ほど述べた鏡を置いたこと、そしてマネキンを床に置いたこと、そのいずれも、見ている人と衣装の関係性を念頭に置いてデザインしたものです。

最後のセクション「日常にひそむ物語」では、複雑で多様な価値観を持つ新しい世代のデザイナーがつくる服がテーマとなりました。複数のデザイナーによる様々な表現を持った作品がありましたが、それらを一つの 카테고리としてまとめなければいけません。苦労したのですが、最終的には、展示されているマネキンと同数の白い箱のような台をつく

りました。そして、その台はL字型のもの、その上にさらに台が乗っているものなど、高さも形も違うものにしました。それらを組み合わせて展示台とし、その上にマネキンが乗ったのです。すると不思議なランドスケープが現れました。たとえば言うならば、「違う建物、違う家、違う人、けれども一つの町に住んでいる」という感じでしょうか。実際の展示でも、立ち上がっている部分の向きなどを調整して、本当に町の中をさまよっているような感じが出るように工夫しました。このように空間の文節がいろいろ混ざり合っている場所では、展示品を見ていく際、ひとつひとつ丁寧に立ち寄っていくような見方をする気がします。そして、このようなランドスケープをつくることで、ものに対する距離感が全く変わるんだなと感じました。

最後のセクションを越えると、最初の「陰翳礼讃」のセクションに戻り、ここでループが完結します。日本のファッションの歴史というのは、「陰影礼讃」の頃の伝統から続く「何か」を受け継いでいるはずです。現代の若手デザイナーの作品に川久保さん、山本耀司さんの作品がもう一度接触することは、非常に示唆に富んでいる気がします。

ロンドン、ミュンヘン、東京での展示デザインをしてみて改めて振り返ると、ファッション展示にはいくつかのポイントがあるように思えます。

1つは、展示される作品のスケールの問題です。展示品が当然ながら身体スケールの衣装、それを着るマネキンが1m80cmぐらい。要するに、同じスケールのものがずっと繰り返されるのです。そのなかで展開や、意外性といったメリハリをいかに出していくか。見る人が飽きないだけでなく、「次はこういうものなのか」という驚きや、次への予感を覚えながら見ていくことができるにはどうすれば良いか。それが非常に重要だと感じました。

もう1つは展示空間の大きさです。小さいスケールのマネキンと大きい空間をどう繋いでいくか。単に空間の中でばらばらに置かれるわけではなく、空間と一体になるような、そういう展示を心がけなければいけません。また、それぞれの衣装には1mぐらいまで近づけるので、来館者は細かいディテールまで見ることができます。一方で、それらが群れをなした時のダイナミックな光景というのもまた面白い。特に「Future Beauty」展のように歴史をたどる展覧会の場合には、巨視的な視点と微視的な視点が両方重要になってくるような気がします。

最後にまとめると、展示デザインにおける重要なポイントは、展示されているものと見ている人、そしてそれらを包み込んでいる空間との関係を考え、新しい風景を生み出していくことではないのかと思います。展示デザインは、人とモノと場所、それらの関係をつくり出さなければいけないわけです。衣装を見ている時に他の衣装がどう見えているのか。

あるいは一人で見ているわけではない場合もありますから、他の来館者の存在も重要です。人とモノの間に非常にいろいろな関係があるわけです。それら全体をうまく調和させ、さらに意外なかたちで結び合わせていく。それが展示会場構成の醍醐味だと思います。人、モノ、場所を混ぜ合わせることによって、新しい風景、新しい体験をつくり出すことができるか否か、そこが展示デザインにおけるポイントだと思います。

〈図版〉

Fig. 1. 「Future Beauty」展ロンドン会場

The exhibition *Future Beauty* held at the Barbican Art Gallery, London (15 October 2010 – 6 February 2011).

Photocredit: Lyndon Douglas.

Fig. 2 「Future Beauty」展ミュンヘン会場

The exhibition *Future Beauty* held at the Haus der Kunst, Munich (4 March – 19 June 2011). Photo: Dirk Eisel.

Figs. 3-7. 「Future Beauty」展東京会場

The exhibition *Future Beauty* held at the Museum of Contemporary Art, Tokyo (28 August – 7 October 2012). ©

Museum of Contemporary Art, Tokyo, Kyoto Costume Institute, photo by Osamu Watanabe.